ISSN 0288-1748　2020（令和２）年1月20日発行

大学時報

UNIVERSITY CURRENT REVIEW

No.390
2020
1
隔月刊

地域と共存し、社会に広く開かれた大学に（金沢星稜大学）

特集　学生食堂の課題と今後のあり方

座談会　変わりゆくオープンキャンパスのあり方

小特集　多様化する授業時間

明日への試み　武蔵野大学　わが大学史の一場面　関西大学

加盟校の幸福度ランキングアップ　国際基督教大学／桃山学院大学／早稲田大学

クローズアップ・インタビュー
東海大学体育学部講師、全日本柔道連盟全日本強化スタッフ・女子コーチ　塚田真希さん

日本私立大学連盟

Thesaurus Universitatis

3

1

4

2

5

3 創設者 ルドルフ・ボーリング・トイスラー

4 礼拝堂入り口

5 礼拝堂入り口前、床のレリーフ　フェニックス

1 礼拝堂正面

2 礼拝堂側面のステンドグラス

聖路加国際大学礼拝堂

聖路加国際大学の創設者ルドルフ・ボーリング・トイスラーは、1900年に米国聖公会宣教医師として来日した。彼は、日本の医療の概念には従来無かった、公衆衛生や医療社会事業などをこの国に根付かせる努力を惜しまず、不屈の精神で取り組んだ。特に看護師の教育に関しては、優秀であると同時に教育者になれる看護師の育成を目標とし、当時としては画期的な先進的看護教育を行った。

1933年、聖路加国際病院の新しい建物が完成し（現在の旧病院にあたる）、礼拝堂はその中心に位置付けられていた。この礼拝堂は1936年に完成したが、残念ながらトイスラーは1934年に逝去したため、礼拝堂を目にすることはなかった。

J・V・W・バーガミニーの設計によるこの礼拝堂は、旧病院と一体化しており、全体的にはゴシック調に纏められている。礼拝堂に入ると6階吹き抜けの高い天井と、息をのむような美しいステンドグラスを目にすることができる。

旧病院では、各階のナースステーション後ろのバルコニーからも患者が礼拝できる設計となっていた。また、玄関から礼拝堂につながる廊下や礼拝堂前の階段にはさまざまなレリーフが施され、病院と礼拝堂の融合を表している。照明もバーガミニーの設計によって、周りの雰囲気に溶け込み、荘厳さを強調している。

この礼拝堂は患者と職員の祈りの場であり、トイスラーの精神、信念そのものを表していると言っても過言ではないだろう。

聖路加国際大学は2020年に看護教育100周年を迎える。聖路加の象徴であるこの礼拝堂の祭壇の下に、今もトイスラーは静かに眠っている。

大学時報

No.390　2020.1

年頭所感　自由で多様な大学が個性豊かな人材を育てる　長谷山彰　10

Thesaurus Universitatis　だいがくのたから　聖路加国際大学　12

表紙・大学点描　金沢星稜大学　篠崎尚夫　16

巻頭言　誠実⇄社会に役立つ　平川　新　32

女性の生き方をサポートする女子大学

座談会　変わりゆくオープンキャンパスのあり方　34

石川さゆり／高原幸治／渡辺　篤／佐藤信行／（司会）兼高聖雄　42

特集　学生食堂の課題と今後のあり方

持続可能な学食運営への問題と解決策——味覚化から視覚化へ——　桜田東樹　50

学生食堂の直営化が生み出したもの——魅力ある食堂づくりと教育の場の両立——　津田謹輔　56

学生が学食に積極的なコミット——昭和女子大学の取り組み——　松丸英治　62

つどう　つながる　つくりだす——学生・教職員・地域社会のプラットフォームへ——　東海林真巳　66

新津駅前まちなか学生食堂——学生ランチMAPプロジェクト　石川善樹　68

ずいそう　継続性のある中長期計画を目指して　田代康則　70

小特集　多様化する授業時間

100分授業の展開　稲葉興己　74

105分授業への移行経緯と現況——大阪学院大学における教育課程・4学期制と一体化した授業時間改変の試み——　大野昌一

100分14週授業導入の機会を生かす　榊原暢久　80
105分授業の経緯と実践――東京大学の試み　森山　工　86

私の授業実践――教育現場の最前線から
スライドデザインとアート――ビジュアルデザインの重要性――　佐藤涼一　92

明日への試み
武蔵野大学経営学部
大変動期の経営学部教育の実践を考える　古川一郎　94

わが大学史の一場面――日本の近代化と大学の歴史
多様でやわらかなキャンパスを求めて
――関西大学千里山キャンパスの100年と村野藤吾・関西大学　橋寺知子　98

加盟校の幸福度ランキングアップ《小中学生向けイベント編》
早期リベラルアーツ教育提供の試み・国際基督教大学　川島美菜　104
学生を通じて広い世界と英語に触れる・桃山学院大学　友沢昭江　106
小中学生向け科学実験教室「ユニラブ」・早稲田大学　橘　和希　108

クローズアップ・インタビュー
東海大学体育学部講師、全日本柔道連盟全日本強化スタッフ・女子コーチ
塚田真希さんに聞く　（聞き手）外川智恵　110

新会員代表者紹介
大正大学　118

執筆者・出席者のご紹介・119　連盟ニュース・121　編集後記・122

〈カット〉熊谷有子

〈表紙写真〉

地域と共存し、社会に広く開かれた大学に（金沢星稜大学）

金沢駅から約3.9キロとアクセスが良好であり、ひがし茶屋街、兼六園、香林坊などの観光地にもほど近い金沢市の中心に位置する金沢星稜大学。「金沢経済大学」を前身として設立された本学は、2002年に「金沢星稜大学」に名称を変更し、2017年に創設50周年を迎えました。経済学部、人間科学部、人文学部の３学部５学科体制で、「自分を超える力をつける。」をスローガンに、地域社会に開かれた教育を展開しています。短期大学、中学・高等学校、二つの附属幼稚園を併設校に有し、北陸の産業・文化・経済の発展に寄与するとともに、広く国内外の社会に貢献することを使命としています。

昨日の自分を超えていく日々。
輝く未来は、その先にある。

自分を超える力をつける。

—— 金沢星稜大学

学びの特徴

地域から学ぶ、自分の足で得る

1年次からゼミナールを開講し、少人数かつ体系的な講義に重点を置いています。フィールドワークでは地元地域のみならず、海外への実習や研修も数多く行い、座学だけでは得られない学びを修得しています。

20カ国50大学を超える国や地域で世界を知る

金沢星稜大学では、世界各地の大学などの教育機関と協定を結び海外にも大きなネットワークを構築しています。学生の目的や目標に応じた海外留学・海外研修プログラムを用意し、学部学科を問わず毎年多くの学生が世界へと学びの旅に羽ばたいています。

目指すのは“逆転満塁ホームラン”

「金沢星稜大学を選んだのは、『就職がいいから』」。多くの新入生がこう答えます。「MOONSHOT講座」、洋上合宿クルーズ「ほし☆たび」、「就職合宿」などユニークな就職支援を展開し、就職で“逆転満塁ホームラン”を打つことを目標にしています。

経済学部

経済学部では、ゼミナールを中心とした体系的な講義を通じて、経済学・経営学の各分野で確かな基礎力とビジネスの現場で役立つ知識と技能を兼ね備えた、地域社会で活躍できるビジネスパーソンを目指します。

経済学科

経営学科

Point 1 ／経済・経営について基礎から学べるカリキュラム構成

Point 2 ／地元地域との連携を活かした実践的かつ実用的な学びを修得

Point 3 ／資格取得につながる科目や世界から学ぶ海外実習も多数開講

人間科学部

人間の心・体・頭の総合的な発達と能力の開発について科学的に研究し、人間社会を育てていく人材を養成する学部です。
「スポーツ」と「こども」の分野から人間を探求しながらその知見を実社会で活かせる社会人を育成します。

スポーツ学科

こども学科

Point 1／講師陣は各分野の第一線で活躍経験のあるスペシャリストたち

Point 2／地域社会をフィールドにしたアクティブラーニングが充実

Point 3／保健体育教員、小学校教員・幼稚園教諭・保育士などへの確かな就職実績

異なる言語や文化は、壁を作るかもしれない。でも、一歩を踏みだすことで自分の可能性を切り開く「架け橋」に変えることができる。そんな人材を育成するために誕生したのが、人文学部 国際文化学科です。

国際文化学科

人文学部

Point 1／1年次後半から2年次前半の約4～8カ月間、学部生全員が早期海外留学を経験

Point 2／留学前後に必要な英語力を段階的にかつ効率的に身につけるカリキュラム

Point 3／専門科目は原則英語で受講、卒業研究報告書も原則英語で作成

建学の精神

「誠実にして社会に役立つ人間の育成」

KANAZAWA SEIRYO UNIVERSITY
金沢星稜大学

■ 経 済 学 部　経済学科 | 経営学科
■ 人間科学部　スポーツ学科 | こども学科
■ 人 文 学 部　国際文化学科

www.seiryo-u.ac.jp/u/

大学時報

No.390　2020.1

誠実⇔社会に役立つ

篠崎　尚夫●金沢星稜大学長

「誠実にして社会に役立つ人間の育成」、これが金沢星稜大学の「建学の精神」である。

「誠実」であることが本質であれば、「社会に役立つ」は現象であり、ゆえに、「誠実⇔社会に役立つ」となる。

「誠実」が増せば「社会に役立つ」も増し、「社会に役立つ」が大であれば、「誠実」も大であるといえる。内面（本質）と外面（現象）は、つながっている。

１９６７年、北陸の地に誕生した本学。爾来、星稜学徒は、「誠実⇔社会に役立つ」の相互作用に、いまも夢中だ。

2020
年頭所感

自由で多様な大学が個性豊かな人材を育てる

長谷山　彰●私大連会長、慶應義塾長

新年おめでとうございます。

年頭に当たり、日本私立大学連盟加盟法人ならびに加盟大学のますますのご発展と、ご関係の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

日本私立大学連盟が２０１８年にまとめた『未来を先導する私立大学の将来像』に描かれているように、私立大学はそれぞれ新しい教育研究の取り組みを推進しています。

「第４次産業革命」と呼ばれる産業構造の大きな変化、人口減少時代、「人生１００年時代」の到来、地方創生とグローバル化など、変化の時代を生き抜くためには高度な知識と多様な能力を備えた人材が求められます。『未来を先導する私立大学の将来像』に大学が育成すべき能力として挙げられているのは、人間としてのあり方を常に問う、主体的で洞察力に富んだ思考力、ＡＩによる代替が不可能な分野で新たな職能を深めることのできる柔軟な能力、歴史と現在、変わるものと変わらぬものを知った上で、今日と未来の変化を理解する能力、地域（世界における日本、日本における各地域）を熟知し、日本および地域が持っている資源を活用し、その独自性を表現する能力などです。こうした能力を備えた日本の未来を担う高度人材の育成を目指して、本年も加盟大学においてさまざまな教育研究の取り組みが進むことを期待いたします。

ところで、２０１９年は私立大学のみならず大学全体に大きな影響を与える政策の決定、変更が続きました。11月、文部科学省は２０２０年度入試から予定されていた大学入学共通テストにおける英語民間試験の活用を見送ることを発表しました。この時期になっての決定に高校・大学をはじめ関係者から驚きの声が上がり、混乱も続いています。これまで、多くの課題、問題点が指摘され、懸念の声が上がっていたにもかかわらず、実施を急いできた印象は拭えません。しかし、冷静に考えれば、この機会にいったん立ち止まって

熟慮する時間を得たことはせめてもの救いです。

気候変動や自然災害の多発、テクノロジーの急速な発展などにより、想定外の事態が次々と発生する状況の中で、地球規模の課題に取り組み、世界で活躍する人材を育成するためには、知識習得型から課題発見解決型の学習への移行によって、考える力を養うことが必要です。グローバル化が進行する中で、異文化を理解し、異文化摩擦を平和的に乗り越える、十分なコミュニケーションをはかるためには、高度な語学能力が求められることも同様です。それを踏まえて、高大接続による高等教育改革を実現するために入試改革が必要であることは、関係者が等しく認めるところです。問題は、現行、50万人が受験する大規模な入試形態の中で、考える力、総合的な語学力を評価するために必要な人員、費用、場所など技術的な課題の解決に気をとられ、次第に当初の理念から遠ざかってしまったことにあります。今後、文部科学大臣の下に検討会議を設置し1年間をかけて議論するとのことですが、高校・大学の教育現場の声に真摯に耳を傾け、試験の内容、評価基準、受験機会、経済的負担などにおける公平性を確保し、試験に対する信頼性を高める方策を打ち出すことを望みます。

また、２０１９年に私立学校法が改正されたばかりですが、早くも大学のさらなるガバナンス強化の議論が始まっています。大学は公益法人の一種ですから、社会の理解を得られるよう適正な運営を行う責務がありますが、一部の大学による不適切な運営を問題視するあまり、角を矯めて牛を殺すが如き規制強化が行われることは望ましくありません。そもそも学校法人は成り立ちやあり方において他の多くの公益法人とは異なる独自性を持っています。そのために学校教育法や私立学校法があり、大学設立時における厳しい設置認可、そして教育・研究・法人運営の全般にわたる認証評価も行われています。設置においても運営においても、比較的規制が緩やかな他の公益法人とは一線を画するものです。

１９９１（平成３）年の大学設置基準の大綱化に当たって、当時の大学審議会は答申の中で、「各大学が自由で多様な発展を遂げるよう大学設置基準を大綱化する……必要がある」と述べました。私立大学が建学の理念を継承し、個性を持ちながら、多様な人材を育成し社会に貢献するためには、自ら主体的に改革に取り組み、自律性を高めることが必要です。

日本私立大学連盟として何ができるか、何をすべきか、本年も加盟大学・法人の皆様とご一緒に考えぬいていきたいと思います。

女性の生き方をサポートする女子大学

平川 新●宮城学院女子大学学長

1 キリスト教主義の大学について

近現代日本の女子教育にキリスト教のミッション・ボードが果たした役割は、きわめて大きい。ミッション・ボードとは、欧米の教会が宣教師を派遣するために設置した伝道局（Board of Missions）のことである。幕末に開国して以降、日本にはプロテスタントとカトリックを母体とする欧米のさまざまな教団が宣教師を派遣してきた。当初は滞日外国人のための礼拝が主な役割だったが、各地の外国人居留地に出入りする日本人が徐々に聖書学習や礼拝に参加するようになった。ここで学んだ日本人が伝道者として活躍した事例も少なくない。

その後1873年、明治政府がキリスト教布教を公認したため、国内で自由な布教が可能になった。江戸時代の禁教令の影響もあって布教には困難が伴ったが、宣教師や日本人伝道者たちは教育機関の創設を重視した。教会へ未信徒を誘うことと併せて、青少年に英語教育やキリスト教主義教育の場を提供することによって、キリスト教精神とキリスト教文化の普及を図ったのである。宣教師たちが創設した学校をミッション・スクールと呼ぶのは、そこに由来している。

ただ近年はミッション・ボードからの独立が進んで、財政支援や教員派遣を受けない学校も増えたことから、ミッション・スクールではなく、キリスト教主義学校と称することが多くなっている。

ミッション・スクールは、人口の多い大都市を中心に次々に創設されていった。現在の大学でみると、プロテスタント系とカトリック系を合わせて、

70校を超えており、日本の高等教育に占める役割は大きい。

2　宮城女学校から宮城学院女子大学へ

1872年に公布された学制では、華族・士族から一般庶民にいたるまで、男女ともに「不学」の者がないように小学校に通わせることが布達された。翌年の就学率は男子が約40％、女子が約15％だが、1893年は男子70％、女子30％であり、格差は大きかった。小学校は男女共学だったが、1879年の教育令によって小学校以上は男女別学とされた。明治政府は男子のための中学校は積極的に開設していったが、女子のための女学校は限定的だった。

こうした状況をみて、女子教育の機会が少ないと考えた宣教師たちは、1870～80年代にかけて、全国各地にミッション系の女子校を次々に開設していった。現在もキリスト教主義の女子校が多いのは、こうした経緯があったからである。

宮城学院の前身である宮城女学校は、1886年に創設された。創設者はキリスト教の伝道者である押川方義であり、初代校長には米国から派遣された宣教師のエリザベス・プールボーが就任した。聖書の学習はもちろん必修。英語の授業もあり、音楽は賛美歌とオルガンの指導であった。1890年のカリキュラムを見ると、漢文、地理、歴史、理科、家事、図画、体操などが並んでいる。和漢洋が混淆した内容だが、西洋文化に対する興味と関心からハイソサエティな家庭の子女の入学が相次いだ。

第二次世界大戦後の1949年、宮城学院女子大学が新制大学として発足した。戦前から培ってきた高等女子教育の伝統を、戦後の新制大学に継承し発展させていくことになった。

3　時代に対応した学部・学科の再編

開学時の宮城学院女子大学は、学芸学部のもとに英文学科と音楽科の2学科からスタートした。1955年には短期大学に保育科、1959年には大学に家政学科、1964年には大学に日本文学科、短期大学に教養科を開設した。1988年には、短期大学に国際文化科を設置している。戦後の社会動向を巧みに反映させながら女性教育の幅を広げ、グローバル化にもいち早く対応してきたといってよい。

だが１９８０年代には、それまでの「女性は短期大学」という意識から「女性も大学へ」という変化が起き、女性の進学状況が大きく転換し始めた。そこで本学でも２０００年に、短期大学の学科を四年制大学に全面転換させた。その後も新学科を開設して10学科となり、大学における学びの間口をさらに広げた。

このように本学は、キリスト教主義に基づく人格教育と総合的なリベラルアーツ教育を基盤としながら、女子の進学率の高まりや女性の社会進出など、時代の変化や要請に応え、不断に学科の見直しを行ってきた。２０１６年４月、従来の学芸学部一学部から、現代ビジネス学部、教育学部、生活科学部を加えた４学部９学科体制へと改組したのも、高校生の進学ニーズや地域社会の要請に応えたものである。

新たに設置した現代ビジネス学部は、観光・国際・地域を学びのポイントに、地域の豊かな資源を活用し新たな価値を創造できる、魅力ある人材を育成している。地元経済界からも期待が高い。

教育学部では、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、養護教諭、保健体育教諭、社会福祉士を養成している。発達段階の諸問題に柔軟に対応できる高度な専門性を身に付けており、本学の学生が保育所や幼稚園などに就職する割合はきわめて高い。小学校教員も80％台の合格率を達成している。

生活科学部の食品栄養学科では、人の命と健康の保持に貢献できる管理栄養士を養成し、国家試験では東北地方でトップの合格率を保っている。生活文化デザイン学科では、建築とインテリアデザイン、衣食住などの生活文化を学び、建築家やインテリアプランナー、生活文化関連企業の企画担当者、家庭科教員など、多様な人材を育成している。

学芸学部には、日本文学科、英文学科、人間文化学科、心理行動科学科、音楽科を置き、創作や表現、異文化理解、人間と歴史・文化など、各学科の専門領域を深めている。共通するのは、それぞれに必要な感性と行動力を社会とのつながりの中で培う学びの場が多いことである。

４　開学70周年「共生のための多様性宣言」

開学以来、本学は、「神を畏れ、隣人を愛する」と

いう建学の精神に基づいて、自由かつ謙虚に真理を探究し、隣人愛に立って全ての人の人格を尊重することを教育の理念としてきた。学生一人一人の多様性と公平性が大切にされてきたのである。

この精神をさらに深め、教育・研究の場における多様性包摂のさらなる発展を目指すために、２０１９年の開学70周年を機に、多様なニーズをもつ全学生のために、「共生のための多様性宣言」を表明した。

年齢、信条、障害、エスニシティなどについては、その多様性を尊重すべきという社会的な合意が形成されてきており、本学も従来からその理念を共有してきた。ところが現今はジェンダー（性別）の概念が流動的になってきたことから、トランスジェンダーの問題が社会的課題として浮上してきた。特に女子大学としては、戸籍上男性であっても自身の性自認が女性であり、女子大学で学ぶことを希望する人にどう対応するかという問題に直面することになった。

そこで本学では、２０１７年に「性の多様性と人権」に関する委員会を設置し、女子大学としての性的マイノリティの支援について検討を開始した。同委員会では、女性としての性自認をもち、女性として生きていくことを選択した人、すなわちトランスジェンダー女性の受け入れを提言し、２０１９年３月の教授会で承認された。

その決定の根拠には、本学の前身である宮城女学校の創設以来、多様な女性の生き方をサポートしてきたという歴史がある。男・女という固定的なジェンダー概念が世界的に流動化している現状をふまえ、それぞれの個性を尊重し、新たな時代の女性を受け入れることが建学の精神にかなうという判断である。

トランスジェンダー女性の受け入れは２０２１年度に開始するが、不安なく学生生活を送ることができる学内環境の整備や、受け入れに多少なりとも違和感を持つ学生への配慮も欠かせない。それぞれの思いを大事にしながら、新しい社会の動きに対応し、多様性を踏まえた共生のあり方を本学なりに整えていきたい。

建学70周年の年に、女子大学としての新しい使命を公表できたことは、女子大学の今日的な存在意義を更新していくことになると考えている。